



田辺聖子 (たなべ せいこ)

昭和3年 大阪に生まれる

昭和23年 樟蔭女専国文科卒業

昭和38年度下半期芥川賞受賞

主なる著書「感傷旅行」「私の大阪八景」

「千すじの黒髪」「貞女の日記」その他

女の目くじら

昭和四十七年五月十日 初版発行

著者 田辺聖子

発行者 増田義彦

発行所 実業之日本社

東京都中央区銀座一の三の九

電話東京(522)四三一(代)

千一〇四 振替 三二六番

関西支局 大阪市北区真砂町五三

書協ビル内

千五三〇 電話(363)一七〇六

印刷 大日本印刷

製本 共文堂

女の目くじら

田辺聖子



実業之日本社版

女の目くじら

目次

I

牡丹の寺 10

人形芝居のある秘境 22

春寒の京の歌 31

陵守の家 36

初夏の長谷寺 51

奈良二月堂お水取り 55

天平の魅惑と幻想 63

忘れ得ぬ山陰 68

高千穂の夜神楽 81

ひとり旅 98

奄美の島唄 107

I

電車のある町 112

淀川の女たち 116

言いつ放し 121

ふるさと遠望 126

モノカキと大阪野郎 132

大阪人の精神構造 148

アベックホテルでびっくり 158

ヤンリク・ヤンタンて何や 171

私の見た自衛隊 183

II

わが別居結婚の内情 196

子供時代 212

略歴 221

ケッタイなり わがおとな息子 225

女性的なるもの 242

男の尊大さこそ可愛らしい 246

心をめぐる随想 252

愛と苦しみ 263

愛をささえる友情 266

あとかき 271

装幀 辻谷和子

女の目くじら

I

牡丹の寺

富満高原とじまといつても、知る人は少ないだろう。

いや、まだほとんど知られていないといふべきだろうか。

地もとの新聞社が、県民の投票から選んだ、「兵庫県観光百選」の中にはいつているのだが、まだまだ秘境という感じで、しかし私の気持からいえば、どうか、車馬往来織るが如く、という観光地にはなつてはしくないのである。

秘境のままですつとしておいて、ふつと思ひ出したとき、あ、あそこがある、あそこへ行けると思つただけで心なぐさむような、何かのよりどころになるような場所であつてほしい。現実には行けなくても、行くことを考えただけで、しばらくまた、元氣を出して働けるといったような場所を、一つか二つは持っていたい、そんな中へ、ひっそりとはいるような場所だ。

兵庫県は瀬戸内海から日本海にまでまたがるという点では、日本で唯一の県であるが、

南北の海沿いばかり発展して、奥はあまり開発されていない。

しかし、播磨の国はもとと非常に古くからひらけたところで、播磨の国造くにのみやつこなどというのも古代史の舞台にたびたび登場する。わりに古い遺跡などの点在するところで、探してゆくと地味ながら面白い旅がたのしめるのである。

さて、私が、人の知らない絶景として紹介されて出かけた富満高原は、兵庫県もすでに岡山に近い、上郡町かみごおりから、さらに北へはいつてゆくところだった。

山陽線の上郡駅で降りて、「金出地」かなでちゆきのバスに乗る。上郡までは、神戸から二時間ほど。さらに駅前からバスに乗って「稗田」ひえだというところで下車すると、ここから目的の地まで、山道を二・八キロばかり。健脚の人は涼しい、深い山路をゆっくりハイクするのもいいだろう。

じつは富満高原に、万勝院というお寺があり、牡丹ぼたんの名所で、山菜料理が食べられるというのである。牡丹の季節にはまだ少し早いかと思われた五月はじめの連休に、私は、上郡駅からタクシーをやって、万勝院まであがっていった。

二十分ばかりで、万勝院につく。車が通れるくらいに山道を切りひらいてあるのだが、登るにつれて片方には、目のとどくかぎりの山脈と深い谷、杉林、小さな集落などが見え、崖がけを幾曲りもするうちにしだいにそれは低く低く、天がたかくなり朗々と視界がひろがっ

て、四囲の山々が眼下に沈んでくる。

と、そのへんからもう、富満高原で、山路の暗さから一気に、空が抜けたようにあかるくなる。

寺は、高原（といっても、広い地域ではなく、険しい山地の頂きの村、という感じである）の中でもさらに小高い場所にあり、たたなわる北播地方の山脈が、足もとにうねっていた。

ながながと土塀^{どべい}のつづく寺は、美しい初夏の夕空を背景に、谷あいのほそ道や村を目の下にみて、山地の冷気のなかにひっそりと沈もっている。

ところが山門を一步くぐると、あっと目を奪われる世界がひろげられていた。境内に二百株ばかりの牡丹がおびただしく咲いているのだ。薄紅あり、いわゆる牡丹色あり、えんじ、紅紫、とりどりに大輪の花がただよっているのであった。

「まだ早いかと思いましたが……」

私は牡丹の園の中にいた住職の新見竜童^{りゅうどう}さんに、茫然^{ぼうぜん}とした思いでいった。

「はい、ほんとうの見ごろは三日ほどあとでしょうかな、まだまだ、花がたくさん開きませんが」

住職は六十を幾つか越した、小柄だががんじょうな体格の人だった。わが子のように牡

丹を丹精^{たんせい}して育てあげ、いまは裏山に二千株も植えている、ということだった。

牡丹の花期は、いくらかのお金を、仏さまにお供えして山門に入り、眼福にあずかることになる。

万勝院はユースホステルでもあって、一泊七百円ほどで泊まることができる。「白牡丹があと一、二日したら開くのですが惜しいことです」

というお話だったが、うす紅の美しさは、匂うようで、両^{さき}のてのひらにも支えかねるほどの大きさを、咲ききわまっていた。

花びらと花びらが照り映えながら、花芯^{しん}にちかづくにつれてピンクの陰が濃くなってゆく深い美しさ。

それに、黒牡丹というのも、私ははじめて見た。紅紫色の濃い、濃紺に近いような、べに色で、妖^{あや}しい美しさがある。

ゆきつもどりつ、私は牡丹の花園の中を、花々に埋もれるように歩いた。微笑したり、黙^{もく}したり、流し目にくれたりしている美人の群れの中をゆくようで、夕闇がおぼろに、足もとから這^はいあがってくるにつれ、花々は白く浮き上がり、夢うつつの心地に人を誘いこ

む。

中国の古い物語の世界は、根のないつくりごとではないのであろう。

牡丹の花というのは物言わぬ美女のようで、冥界から風に乗ってきたかのように妖しい。花びらが措し気もなく重なり合い、重たげに傾きつつ、華麗ではあるが崩れぬさまで、凜とたっている。

古い建物（三百年からになるという）の庫裡へ荷を置いて、私は裏の本堂へ下りてみた。

杉木立、竹藪をぬける道に、シャガのうす紫の花が咲き乱れていた。

野いちごの白い花がびっしりと窪地を埋め、おち椿が道を赤く染める。

山腹の斜面にかけて建っているような寺なので、本堂へゆくのも坂を上り下りする。杉木立が切れると、広濶な地がひらけ、調和のとれた見事な本堂を正面に望むことができた。

本堂の周囲は天を突く杉の木立。それらが槍先をとがらせ、夕映えの残光をさえぎるかのように腕を張って、本堂を守っている。仄暗い。そして森閑とした静けさ。

初夏だというのに、身のひきしまる、すがすがしい冷気。山霊の気かもしれない。

お花畑のように咲きつづいているシャガの花の崖を見て、山路をたどる。

あたりはいよいよ静かに、空気は軽く澄み、鳥の声が多彩になってきた。

すると、木立が切れ、道がついになくなってしまふ。

小さな、頂きへ立つ。富満高原という標示があるので、そこが一番の高所だと知れる。

まだ空は明るかった。太陽が西の峰の肩へかかる時分で、そのあたりだけ金色になっており、ほかはモヤか水蒸気でぼやけ、折りたたまれた山脈は肩のあたりから没していた。

晴れていれば氷ノ山も見えるという。

木の切株に掛けて、しばらく私はじっとしていた。

追いつめられるような冷ややかな空氣に、一瞬、おもわず、ぶるっとする。

何の鳥だろう。リ、リ、リルルル、というような声で目の下につづく樹海のあいだを鳴き交^{かわ}してゆく。

夕日が没してもしばらくまだ明るい空は、ほんのりと牡丹の色を映して赤く、梢^{こずえ}を渡る風しか、耳を打つものはなかった。

荒々しく下草や灌木^{かんぼく}を刈りこみ、木々の枝を払ってつくったらしい頂きは、また、いまにも草や木に埋めつくされてしまいそうに、樹海や山波のあいだにぼつんと、とり残されていた。この寂々とした大自然のおごそかな残照の中で、やがて自分も大自然のクズの一つになり、ついにはかき消えて土に還^{かえ}ってしまいそうな、さびしい、ふしぎに充ち足り